

塾生のみなさん、こんにちは。

昨年9月に開講した「ふるさとジオ塾」ですが、ついに今年度最後の講座案内となります。また、来年度の講座についてのお知らせもありますので、この通信に目を通していただき、最終講座への出席、そして来年度の受講申し込みをよろしくお願いいたします。



3月の最終（第10回）講座のご案内



さあ、いよいよ次回が今年度最後の講座です。シメの講座のテーマその1は「地形と地質からみるふるさと」。私たちの様似の地形や地質（ジオ）にはどんな特徴や魅力があるのか、そして、それらジオと私たちの暮らしや様似の歴史にはどんな関係があるのか。ジオってむずかしそう？そんな心配はいりません。講師は現役の小学校の先生ですから、とっても分かりやすくお話してくれますよ。また、テーマその2として、今年度のジオ塾で学んだことの総おさらいもします。今までに行った場所、聞いた話をもう一度振り返ってみたいと思います。

そして、講座の後のお楽しみとして、懇親会もやります！一緒に学び、そして楽しんだ仲間と一緒に、楽しいひとときを過ごしませんか？もちろん、座学だけ、懇親会だけの参加でも結構ですよ。たくさんのご参加をお待ちしています。

【第10回講座】

1. 日 程：平成23年3月19日（土）
 2. 会 場：様似町生涯スポーツ研修センター（中央公民館の裏手）
 3. 持ってくる物：アポイ岳ジオパークガイドブック 筆記用具
 4. 出 欠：懇親会の準備の都合上、3/11（金）までにご連絡ください。
- 連絡先 様似町役場商工観光課 TEL 36-2120

第1部 座学「地形と地質からみるふるさと」・「今年度のおさらい」

時 間：16:00～18:00

第2部 懇親会

時 間：18:00～

会 費：2,000円



平成23年度ふるさとジオ塾 塾生募集のお知らせ！



ふるさとジオ塾は来年度もやります！

次のとおり塾生を募集しますので、みなさんもぜひご応募ください。

講座回数：月1回・全12回予定

講座時間：野外は日曜日の昼間、座学は平日の夜を予定

受講料：全講座分の資料代等として1,000円程度を予定

募集人数：40名程度（先着順）

申込先：様似町役場商工観光課 TEL36-2120

受付開始：平成23年3月1日（火）午前9時

主 催：様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会

※最後のページにも来年度のジオ塾に関する案内がありますので、ご覧ください。

第8～9回講座のおさらい



講師：羽立豊春さん



講師：水野洋一さん

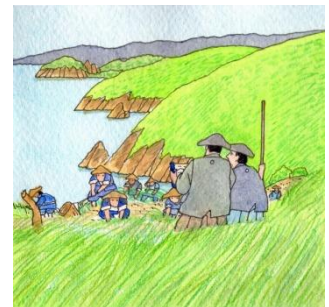
第8回 様似通史① 江戸時代後期：様似の黎明

1. 蝦夷地は松前藩領から幕府直轄支配へ

200年前、欧米では急激に近代化が進み、原料供給源や製品売込先としての海外植民地の争奪戦が始まっていた。その矛先は日本、そして蝦夷地にも向けられる。日本がパニックに陥る黒船出現より70年も前に、蝦夷地にはロシアなどの船の影がちらつき始めていた。それまで、蝦夷地は松前藩の支配下にあったが、欧米諸国の接近に備えた北方警備、松前藩とアイヌの人たちとの争乱の鎮静化などを目的に、江戸幕府は藩から蝦夷地を取り上げ、直接支配するようになる。

2. 様似山道

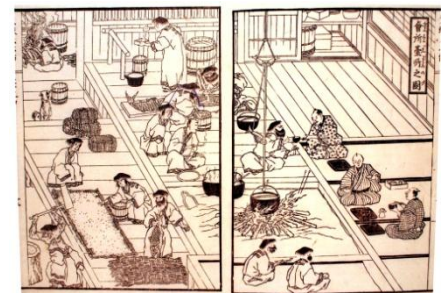
その頃、北方警備のため、幕府は蝦夷地の詳細な調査を始める。調査隊の近藤重蔵と最上徳内は、有事の際の兵士や物資の輸送のためには、断崖絶壁が続く幌満～冬島間、サルル（現えりも町目黒）～庶野間の2カ所の難所に、迂回路としての山道が必要と提案。これが受け入れられ、蝦夷地における初の官営道路となるシャマニ（様似）山道とサルル山道が開削されることになる。延長約7kmの様似山道は、わずか1年間で造られたという。様似山道開削の現場監督は、様似会所の初代詰合を務めた中村小市郎。



中村小市郎が指揮する様似山道開削

3. 様似会所

通常、家臣の給料は米で支払われる。しかし、蝦夷地では米が取れなかったため、松前藩は米の代わりに海岸を分割し、そこでの漁・猟・採取の権利を家臣に与え、家臣はそこで取れたものの売買で利益を得ていた（場所制度）。家臣の多くは、場所の運営・交易を商人に請け負わせた（場所請負制度）。そのための施設が運上屋。その後、幕府が直接支配するようになると、幕府は東蝦夷地の10カ所に役所や宿泊施設の機能を持つ会所を設置する。そのうちの1カ所が、様似にあった「油駒運上屋」が生まれ変わった「シャマニ会所」。様似に会所が置かれた最大の理由は、エンルム岬が天然の港として優れていたため。かの伊能忠敬も蝦夷地測量の折、シャマニ会所に3泊している。



会所の様子

4. 等澗院

幕府直轄支配のため、蝦夷地には多くの武士が派遣されるとともに、一般人の移住も進んだが、しばらくの間は東蝦夷地には死者を弔う寺もなかった。当時、幕府は新寺の建立を一切禁じていたが、箱館奉行の再三の要請により、特例として3つの寺の建立許可が下りる。それが、様似等澗院、有珠善光寺、厚岸国泰寺のいわゆる「蝦夷三官寺」である。なぜ、様似が選ばれたかについては、天然の良港があり栄えていたため、海上交通の難所であったえりも岬に近かったためと考えられる。等澗院建立は1806年、初代住職は百人浜一石一字塔で知られる秀暁。



等澗院にお参りする人々

3世慧統の代、徳川家康 200 回忌に合わせ、等澗院が御神号を賜り「蝦夷東照宮」に位置づけられる（後、御神号は箱館五稜郭に移されてしまう）。8世慈真は、現在国指定重要文化財である等澗院古文書を本山から持ち帰った人で、馬追い上人としても有名。不慣れな厳しい寒さのためか、歴代の住職は短命の方が多かった。

第9回 様似通史② 明治時代前期：維新の荒波

1. 明治維新と蝦夷地

欧米諸国による日本への脅威が発端となり、江戸幕府は衰退の一途をたどる。尊王、佐幕、攘夷、開国など様々な思想が入り乱れる激動の時代を経て、1867年大政奉還・王政復古の号令発布、ここに270年間続いた江戸幕府が崩壊、明治の世となる。その維新の荒波によって、様似はどう変わり、またどう変わらざるを得なかったのか。今回は人物にスポットを当てて探りたい。

2. 矢本蔵五郎

幕府の崩壊により、その出先機関であった会所は廃止となる。当時の様似会所支配人代理で残務整理を任された矢本蔵五郎は、後に会所の財産の払い下げを受けることになる。建物、土地、漁具や漁船、駅漕と馬50頭などの払い下げ資産を活用し、蔵五郎は商業、漁業、海産物仲買業、船舶回送業、駅漕経営など幅広く事業を展開し、様似の発展に貢献した。蔵五郎は人望も厚く、アイヌの人たちからの昆布の買い付けも和人同様の取り引きで行ったという。その様子を記録した当時の「矢本文書」（郷土館保存）は資料としても一級品。



当時の矢本家の店舗

3. 斉藤和助と函館大経

様似山道開削工事の頃、幌満の和助という人物が工事に協力したり村人の世話人のような役割をしていた。その人望と功績が認められ、斉藤の苗字と冬島から幌満の間の漁業権を与えられる。和助の死後、当時の役人や地元民がその功績を讃えて和助の地蔵を作り、今なお信仰の対象となっている。和助の養子夫妻の二男、儀三郎は小さいころから乗馬が得意で、函館の海産商の養子となった後、上京し馬術の腕を磨く。東京九段坂で初めて開催された洋式競馬に出場した儀三郎は、外人騎手を退け優勝する。その様子を観覧した明治天皇は「大慶じゃ」と称賛するとともに、儀三郎ゆかりの地、函館を姓とするよう言いつけたために、函館大経と名乗るようになったと言われている。儀三郎が徳川慶喜の護衛を務めていたために、大慶と名乗ったという他説もある。大経はその後、函館競馬場の責任者や開拓使の高官を務めた。



地蔵になった和助と函館大経

4. 原田安太郎・嘉七親子

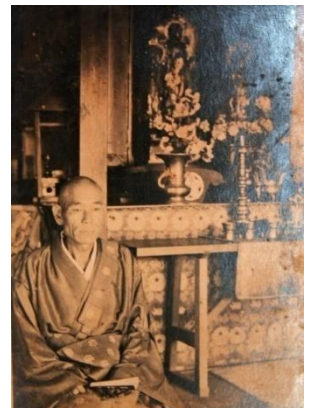
明治に入り、浦河の郡役所が様似山道の中ほどに休憩・宿泊のための建物を造った。その管理人となったのが、静内に入植した徳島藩家老稲田一族の家臣であった原田安太郎夫婦。安太郎は、海岸沿いの道路が整備されるまでの間、明治6年から12年間宿を経営し、その宿は原田宿と呼ばれ、現在も山道の途中にその跡が残される。様似山道付近の多くはアイヌ語地名だが、唯一「山中」という地名がある。おそらく安太郎の屋号に由来しているものと推測される。安太郎の息子嘉七には、原田宿で強盗をはたらこうとした脱獄犯を捕え、札幌まで護送したという武勇伝も残されている。嘉七はその後、様似に旅館を建てたという。



様似山道に残る原田宿跡と原田安太郎

5. 等澗院 13 世住職 塚田純田

維新は等澗院にも大きな影響を与える。幕府の寺（官寺）であった等澗院では、幕府の崩壊とともに維持管理費や生活費が途絶えることになる。そのため 12 世住職徳弁は寺の財産を売りながらなんとか寺を続けていたが、とうとう困窮した徳弁は等澗院から去ってしまい、無住職となった等澗院はその後廃寺となってしまふ。当時、三官寺の他の 2 寺は檀家を募る活動をしたが、筆頭寺としての自負や、函館との関係から来る安心感などのためか、等澗院では檀家を募ることはなかったという。等澗院の財産はすべて払い下げられ、その一部（屏風など）は浦河の光照寺にも渡った。売れ残ったものの中に、等澗院古文書があるが、それが後に国指定重要文化財となったのは幸運なこと。その後、等澗院の本山では復興を計画し、そのために派遣されたのが後の 13 世住職塚田純田。純田は檀家予約達の寄進を受け、円山に 33 体の観音像を配置したことから、円山はその後観音山と呼ばれるようになった。世話人達の協力を得て、明治 32 年、等澗院は再興され、現在に至る。



塚田純田

来年度のふるさとジオ塾について

Q：来年度はどんなことをやるの？

A：来年度は、次のような講座を予定しています。

4月 座学 「ジオパークってなに？」	10月 野外 「バスで巡るジオサイト③」
5月 野外 「アポイ岳と高山植物」	11月 野外 「様似のどうぶつ」
6月 野外 「様似の海のいきもの」	12月 座学 「様似の水産業」
7月 野外 「バスで巡るジオサイト①」	1月 座学 「様似の歴史①」
8月 野外 「海から見るふるさと」	2月 座学 「様似の歴史②」
9月 野外 「バスで巡るジオサイト②」	3月 座学 「まとめ」

Q：来年度の講座の内容は、今年度と同じなの？

A：初めてやるものもたくさんあります。たとえば、8月には船に乗って海から様似のまちや地形を眺める、なんてことも考えています。

今年度は秋からの開始だったため、野外講座が少なくなってしまったのですが、上にあるとおり、来年度はもっと多くの野外講座を予定しています。

一部には今年度と同じテーマのものもありますが、様々な工夫をして、新鮮味を出していこうと考えています。

Q：今年度の塾生も、改めて応募しなければならないの？

A：申し訳ありませんが、再度応募していただくこととなります。

逆に、今年度受講したからと言って、来年度の受講を遠慮していただく必要はありません。ぜひ来年度もご参加ください。

Q：座学だけの受講の場合も、塾生に応募しなければならないの？

A：今年度同様に、来年度も座学講座は塾生以外にも広く開放する予定ですので、座学だけの参加で良いという場合は、塾生に応募いただかなくても結構です。

ただ、塾生のみなさんにはこのジオ塾通信を配布するなどの特典もありますので、なるべく応募いただければと思います。

編集後記：私は様似に来てまだ 1 年も経っていませんが、このジオ塾のおかげで、いろんな話を聞き、いろんな場所に行くことができました。来年度はどんな話や場所に出会えるか、今からとても楽しみです。皆さん、来年度も一緒に様似の「あるものさがし」を楽しみませんか？ジオ塾への参加、心よりお待ちしております。

アポイ岳ジオパーク ふるさとジオ塾通信 Vol.5

発行：2011 年 2 月

発行元：〒058-8501 様似郡様似町大通 1 丁目 21
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局
(様似町役場商工観光課)

電話：0146-36-2120 FAX：0146-36-2662

E-Mail：apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp

ホームページ：http://www.apoi-geopark.jp/